

一〇二六年一月二十四日

雪被く木々が朝日に綺羅綺羅す
綿雲の綻びし裾冬日差す
太き字で卒寿の叔母へ寒見舞
青空に泰然とあり雪の峰
陽だまりの鉢に溢るる冬すみれ
ポシエットの中に昨日の龍の玉

一〇二六年一月二三日

一碑立つ渡し場跡の枯蘚
古民家の太梁軋む凍夜かな
冬木の芽こぞりて空へVサイン
一と夜さの雨戸を叩く寒の風
大寒や子が走り込む塾の門

一〇二六年一月二二日

人めける犬の寝言や日向ぼこ
日矢射して枯山ぞめくかと見ゆ
強風にたたら走りす枯葉かな
陽光を独り占めせる蝟梅花す
打ち合へる百幹の竹音汎ゆる
見送りし友の背中へ風花す
烈風に枯葦ドミノ倒しめく
家並みの窓いま鏡冬落暉
朝練の児らが縫ひゆく枯木立

一〇二六年一月二一日

さしかかる峠俄に風花す
冬うらら磨く玻璃戸に雲一つ

うつぎ

よし女
もとこ

匕首の月上げて山並み寒茜
初夢に元氣出せよと夫現るる
着ぶくれて双子もこもこやつて来ぬ

一〇二六年一月二〇日

明日香和繁
あひる山椒繁

冬眠の蓑虫風に大車輪
烈風に瞬きやまぬ枯木星
正門で脱帽一礼初稽古

一〇二六年一月一九日

女子の声混じる野球部日脚伸ぶ
独り者同士気ままに女正月
朝市の焚火に世間話あり
易本に良いことさがす女正月

鉢の梅傾き置かるるまま咲きぬ
海風に乗りて匂ふや水仙花
掴み取りの球根太き芽を出しぬ
雪吊りの張りたる繩の搖るぎなし
エプロンの近所同士の御慶かな

なつき
もとこ
たか子
うつぎ
なつき

なつき
もとこ
たか子
うつぎ
なつき

毎日句会みのる選・一〇二六年二月一日